

信 毎 俳 壇

今井 聖 選

- 狂人の居る国避けよ鳥帰る
(佐久市) 西田 和彦
- 桜咲く若葉マークのスカイライン
(上田市) 滝沢むつみ
- 陽炎を巻き込んでいく牛の舌
(長野市) 武田 芳子
- 畦焼くや漢一人の仁王立ち
(飯田市) 大石 昭重
- カーソルをぐるぐる探す老いの春
(須坂市) 牧野 勇水
- 格別な四月始まる八十路かな
(飯綱町) 小林 紀子
- 薫くつをくはえ山鳩春の屋
(佐久市) 佐藤 勝子
- 惜しみつつ手放す釣具老いの春
(長野市) 宮沢 義親
- 春眠や平泳ぎせし夢をみる
(中野市) 増田きみ江
- 能登輪島轍ひるくる臘の夜
(飯山市) 田中 琢雄
- 佳作
馬は蹴り牛は踏み締む春の土
(箕輪町) 向山 政俊
- 写真には写らぬ指を繋ぎ春
(松本市) 久我 綺乃

選 評

一句目、「狂人」の居る国とはどこか。春間言われる一國か二國か。否、他にもあるかもしれぬ。我らの足元は大丈夫か。二句目、若葉マークは郷愁の象徴。スカイラインもまた。自動車産業の盛衰も思

われる。三句目、春の大地の中での牛の舌の動きがよく描写されている。四句目、仁王立ちがいかにも炎を背景とした男臭い農夫の姿を見せている。ここにもどこか昭和という時代が見えてくる。

神野 紗希 選

- 慧星の近づくや幹のぼる蟻
(長野市) 南郷 修二
- 蝌蚪を喰ふ巨大蝌蚪なり水濁る
(小諸市) 加藤 陽介
- 花薺わたしとおなじようなりと
(安曇野市) 丸山 冬身
- 未開地の雲雀にオニキスの眸
(中野市) 風間 陽介
- 春光の乳白色の聖女の画
(富田村) 金本 牧子
- 野をめぐり霜なき八十八夜かな
(中野市) 茅川 菊水
- サクスの金の音色や遠霞
(須坂市) 富田 孝弘
- 一年のただただ速しこみ狩
(長野市) 中沢 義寿
- スナックのマドラー振って春つふふ
(長野市) 宮沢 信博
- ウィッグはあしたの私桜咲く
(長野市) 武田 芳子
- 佳作
初桜乳房をさぐる仔山羊かな
(長野市) 北沢 時江
- 登校の班長小柄新学期
(佐久市) 角田行々子

選 評

一句目、近づく慧星と幹を登る蟻と。宇宙の極大と大地の極小がじりじりと近づく。人間のあずかり知らぬところで世界は刻々と躍動しているのだ。二句目、大型の蛙なら、蝌蚪(おたまじゃくし)も巨

大。同族の小さな蝌蚪すら食べる巨大な蝌蚪の食欲を、水の濁りに体現させた。三句目、自分に似た人をどう思っているか、心の感触を季語に託した。薺の花なら素朴な共鳴。ともに春風に吹かれたい。

坊城 俊樹 選

- 夜半の春今なら此に胸の内
(飯島町) 横山 真弓
- 煩惱の何万倍の飛花落花
(松本市) 竹内 千波
- 春怒濤治まれば又のたりのたり
(飯綱町) 小林 紀子
- 窓文の詞華踊りだす梅の夜
(佐久市) 真山 邦弘
- あんなの暗に陣取る桜漬け
(安曇野市) 丸山 進也
- 正面に万緑の山開院す
(千曲市) 滝沢 武子
- 春灯下ここやめやう円周率
(飯山市) 田中 琢雄
- 早春の十九夜の鉦村中に
(小諸市) 佐藤ゆきな
- 高遠は桜花爛漫花袋の碑
(辰野町) 粟津原吉弘
- うららかなや約少年に振り向かれ
(南相木村) 猿谷 秀
- 佳作
夜もすがら散りたくないと花の声
(須坂市) 丸山 英子
- ちよい呑みを誘ふ春雨寄席唄り
(佐久市) 吉岡 徹

選 評

一句目、春のしみじみとした夜更け。もし亡くなった母がここに居るなら、今ならかつての胸の内を言えたのという感慨。本当に共感する。子どもというものはそういうものなのだろう。二句目、

何万の桜が散るということで煩惱を消し去る。それらが個人にも大衆にも降り注ぐ。三句目、春の海はいつも「のたりのたりかな」というばかりではない。それは春の怒濤が過ぎた後のことこそ。